

## 極楽寺建築物の変遷

極楽寺建築物の変遷については、「廿日市の文化」第二輯に近藤豊氏が、「極楽寺本堂」なる一文で古建築学的な考察を致して居られますので、文書的な見地より私見を述べてみたいと思います。

先ず、当時の「棟札覚控」の中に、

聖天 中天  
迦陵①伽声 大檀那大梵天王大檀主毛利元就朝臣 永禄五年

(梵字) 奉再興上不見山浄土王院極楽寺本堂国家大平諸人②楽修

哀愍衆生者  
我等今敬礼 勸進物帝釈天王勸請者当住持③源法師敬白

裏書 奉為大檀主国家安全子孫長久祈修

①頻 ②快 ③祐

との棟札の写しがありますから、永禄5年8月にはすでに本堂があり、しかもそれが相当に荒廃していたので、住持③源が勸進となり、大檀那毛利元就公を得て再興した事実が推定されるのであります。

この永禄五年には元就は8月石見国を平安し、9月には出雲に兵を進めているのであります。之の永禄5年の建築物の存在を裏づけるものとして、当時の鰐口の銘文を見ますと、

奉施入鰐口芸州佐西郡極楽寺常住 明応二年丑五月朔日本願明賢  
大工久信敬白

とあり、永蔵5年より69年前の、この明応2年に、本願明賢により、久信を治工として、この鰐口は鑄造されたのであります。直径45糎あり堂々たるものでありますから、この時既に本堂があり、それもこの径45糎の鰐口を掛けたのですから、実に立派なものがあつた事は明確であります。次に鐘銘によりますと、

扶桑国山陽道安芸州佐西郡上不見山極楽寺○過云正法王如来未来普光仏於現在名日觀世音大士彼大士古道道場也或夜不思当山之鐘被賊奪放諸行無常之響絶焉此沙門明源大誓願抽至誠蒙十方檀那之息 勸寸鉄半錢不日大掛洪鐘之鼎新於半空補其闕者也

銘日(略)

明応五年丙辰之夏六月十八日

願主明瀨住家久大工久信

大檀那藤原朝臣掃部頭宗親

(現在の鐘は再造で、延宝六年三月廿日市宮屋長右衛門易直 が施主となり、山田次右衛門貞栄が鑄造したものです、銘は再銘されているのであります)

とあり、既にあつた鐘が賊に奪われたので、願主明源が大檀那藤原掃部頭宗親を得て明応5年6月18日に再び新しい鐘を釣っているのであります。

住持は家久、治工は前述の鰐口と同じく久信であります。考察するに、この明応頃は、大檀那として神領桜尾城主藤原氏があり、寺は相当な規模で営まれていたのであろうと推定されるのであります。

しかし、之も藤原氏が戦国期の動乱の中に衰微してまいりますので、やがて当寺も次第に荒廃したのではないのでしょうか。それ故に、この明応5年より66年を経て永祿5年に元就による再興がくるのであります。

近藤豊氏は本堂は永祿の棟札の写しがあることと、「永祿を確定し得ないまでも、様式上室町時代と認められる所も残っている」ので、この本堂を永祿の建立と考えて居られるのでありますが、明応頃まで遡られないものでしょうか。

棟札の再興とはどのような状態の謂いでしょうか。再興と再建とは同じでしょうか。私は再建とは、例えば荒廃したので、それを壊しく新しく建てるというニューアンスであり、再興とは、例えば荒廃してだめになろうとしたものを元通りにしたという位の違いがあるのではないかと考え、本堂の建築年代を永祿と明応では明確に建築様式が異なるのならいたし方ない訳ですが、若しそうでないならば、永祿でなく明応にまで遡るべきだろうと考えるのであります。

次に宝珠露盤銘に

上新造」極楽寺御堂」之上葺寺舛」鑄貌共仁以」之矣者也」且那藤原朝臣」宍戸簪事備」前守元次公」本願法印」③宗」皆慶長四天」己亥霜月吉日」良辰」竜雲寺」奉之」

とあり、即ち、慶長4年に賄示は大檀那として宍戸備前守元次公を得て屋根の修築を行っているのであります。この宍戸元次公と当寺との関係は私が初めて発見した事でありまして、当寺の文書にも「宍」なる文字は誤って居るのであります。即ち、露盤が屋根の上にあるために実現の機会に乏しいことと、毛利氏との関係に当寺を見ようとする偏見が、この宍戸公との関係を見逃していたのであります。

例えば「広島を饒る山の研究」にも「現在の本堂は永祿5年毛利元就公の再建せるものであるというから、昭和5年を去る実に368年の星霜を経たものであると、県下稀に見る見事な檜皮葺宝形造りの屋根の擬宝珠は銘の写がないので、確かな年代は判らぬが徳山毛利侯三代の祖元次公の寄進ということであるから、永祿5年より150年程経った享保の年代にも大修理が行われたものであろう。」と元次公を徳山の毛利元次公に擬しているのもこの間の事情によるのであります。

当寺文書の「上不見山略縁記」にも、嘉永安政の頃、毛利家より当寺の縁起をねられたに對し、之が無く、瑞真なる住持が「東西由緒有之寺院に走り」「山主宥然古記」を探し得て、之を写したという意味の事が書いてあります。

宍戸元次公は毛利家の族将でありまして、通志には「光明寺城(五日市)一に高崎と稱し今は龜山という、宍戸元統甲立五竜城主の守所たり。宍戸元統宅址 海老山の北麓にあり。」とあり、又、巖島神社の古文書にも、天正20年3月朔日棚守左近将藍宛の書状なども残って居り、この附近とは深い関係があるのであります。

又、元次公は毛利家文書1038慶長20年卯月14日付の12名連署の起請文にも「輝元 秀就 秀元 元宣 天鎮 元俱 吉川広家 広正 宍戸元統 阿曾 沼元随 繁沢立節 元景」と名を連ねて居る事によっても毛利家に於けるその地位は明らかであります。

この元次公にとっては慶長4年は文祿元年より慶長3年に至る征韓の前後両役陣に参加されたので、その翌年にあたるのであります。このあたりにもこの奉獻の心的機制がある様に感ぜられます。

宅址といわれる海老山北麓は現在相当に地形は変貌して居りますが、この附近にあったと思われる五輪塔27基が護国神社傍に集めてあり、時代もこの時代にふさわしいものと見られ、宅址と関係づけられます。

次にこの露盤の上の擬宝珠には

宝永元季卯月」吉辰月当寺」一代恵海浩之」冶工」山田氏貞能

とありますので、慶長より105年を経た宝永元年に何らかの修築が行われたのであります。

ちなみに山田貞能は廿日市在の中世よりの鋳物師でありまして、現在その鋳造が判明しているものに

洞雲寺鐘(元禄8年4月) 大頭神社鐘(元禄15年11月)  
常念寺鐘(宝永6年6月) 浄教寺鐘(享保元年10月)  
西福寺鐘(享保10年秋) 最禅寺鐘(享保11年仲春)  
立善寺鐘(元文4年7月) 西法寺鐘(元文5年3月)  
巖島神社燈籠(月日不明) 巖島神社多宝塔相輪(月日不明)

などがあります。

さて、極楽寺本堂に関しましては、この宝永元年より84年下り、「極楽寺浄土王院諸控」に

天明八年戊申四月吉祥日本堂キリノカワ柱不残替御拝屋祢葺替其他  
廊下ふきかへ本堂茅葺替木部屋一字再建立 地蔵堂ふきかへ  
現住本坊瑞如  
庄屋 当村理平太  
□□ 同代 〇〇  
大工 こふ助木挽坪平

となり、又同じく瑞如により、二年を経て、

覚

一本堂下屋祢葺替仁王門屋祢並柱替相圀

寛政二年四月 日 現住本坊 〇〇 瑞如

とあります。また、宝珠露盤の下に四角の台が入れてあり、之には

維時文政三年「庚辰十月」芸州佐伯郡白「砂村不二見山」  
極楽〇〇〇〇」〇〇〇」当村」山村伯元」〇〇伏谷」  
竹内甚九郎」同村白砂村」山村秀蔵」当村組頭」河野藤兵衛

とありますので、又々、30年を経て修理の行われたことがわかります。この時の修理は大がかりであったと思われ、その時の記念として本堂前に、次の如き銘文のある宝僅印塔が建てられています。

惟時文政三年庚辰十月芸州佐伯郡白砂村  
上不見山極楽寺現主瑞宝敬建

当村	山村伯元
割庄屋上伏谷	竹内甚九郎
同役白砂村	山村秀蔵
当村組頭	河野藤兵衛
当村社倉役	山村常蔵
当村同役	小方与一
当村	漁八良次

以上考察しました所は本堂の修理に関するものでありますが、之より二次的におぼろげながら、無住の時代や住持の交代等寺運の変遷が推定されるのであります。

即ち、第一期は明応を中心とする「明賢」「明源」の時代であり、大檀那としての藤原氏があるのであります。やがて、藤原氏が滅びますと衰運、そして、住持の交代があったと推定され、次に第二期隆盛期として、毛利家に依存する、「③源」「③宗」の時代があり、次に毛利―福島―浅野と政権の交代を経て、江戸初期には、無住、或は正覚院や円明寺による兼住、或は短い期間での交代等の衰運期が繰り返され、その間に初期としては「宥然」、延宝の「秀恵」、天和の「教道」、宝永の恵海等の住持があり、江戸後期に入り「瑞宝」「瑞真」の第三期回復期になり、その後第四期となり、現在に至るのではないのでしょうか。近藤豊氏の『内部2本の大虹梁など長大な構架材が後補材に取替えられているのはどういう理由によるものであろうか。それほどまでに荒れていた時期があったのであろうか』と言って居られるこの事実は、このような変転や衰運のあったことを建築白体が告白しているのではないだろうか。

いずれにしても極楽寺本堂は近郷に於ける最も古く、由緒ある建築物である事は明白であります。

今後の保存維持には十分な措置がなくてはなりません。

